マダガスカル紀行一

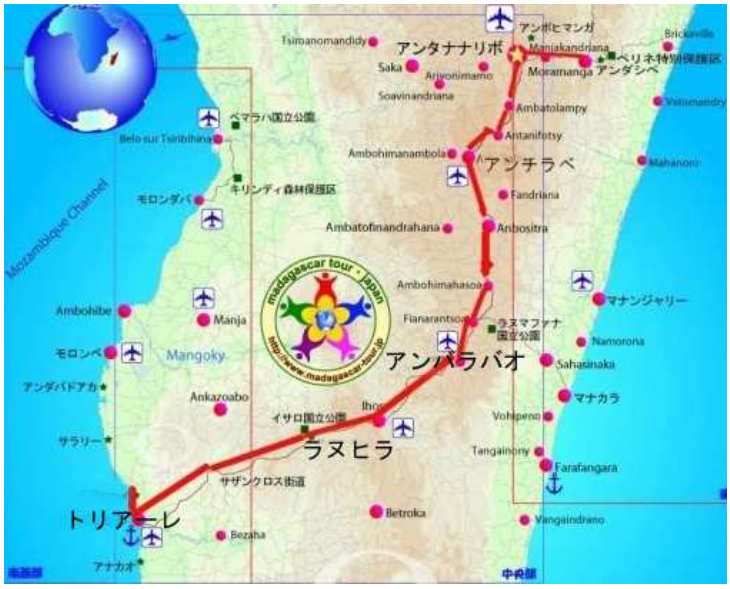
多様な表情のマダガスカル

マダガスカルは多様な表情を持った国だ。首都アンタナナリヴォからサザンクロス街道と呼ばれる国道七号線を南西へ九六〇キロ、トリアーレというモザンピーク海峡に面する港町まで旅をしたが、気候と風景は目まぐるしく変わった。

アンタナナリヴォは標高一五〇〇メートルほどの高地性気候。日本と反対の南半球に位置するマダガスカルの八月末か九月初めは、日本でいえば早春に当たり、少し肌寒く感じるほどの乾いた涼しい風が丘を渡っていた。

そこから一三〇キロほど東に向かったアンダシベは熱帯雨林の中の町だ。インド洋からの南東貿易風が山に当たり、一年のうちに二〇〇日は雨が降るという。私が訪れた日も一日中雨だった。キツネザルを追って雨林の中をぬかるみに足をとられ、ずぶぬれになりながら歩き回った。

中部脊梁山脈の西側、アンチラベからアンバラバオにかけては乾燥した丘陵地帯だった。青々とした麦畑やこれから田植えを待つ棚田、ぶどう畑などが広がっていた。



この町の郊外に広がるイサロ国立公園は、ジュラ紀にさかのぼる侵食された砂岩、河畔林と深い渓谷、ヤシの木が並ぶオアシス、タピア林、そして広大な草原とマダガスカルのグランドキャニオンと呼ばれる景勝地だ。

そこから西へ二五〇キロ、港町トリアーレまで来ると完全な乾燥地帯だ。亜熱帯高気圧に覆われ年間降雨量は三〇〇ミリ程度。気温も三十度近くまで上がり、バオバオの木が青

サザンクロス街道。マダガスカルのエアーズロックと呼ばれる聖なる山

空に枝を広げる。

たった三週間の旅でも、このような多様な表情を見せてくれるマダガスカルゆえに、「マダガスカルってどんなところ」という問いについて簡略に答えることはなかなか難しい。

そこで思いついたのは、マダガスカル紙幣の絵柄のことだ。マダガスカルの通貨単位はアリアリ（Ａｒ）という。現在、一アリアリは約〇・〇三円。百、二百、五百、一千、二千、五千、一万の紙幣がある。いずれの紙幣にもマダガスカルを象徴する動植物や風景が描かれている。

まず取り上げるのは二百アリアリ札と一万アリアリ札。二百アリアリ札にはいくつかの地域ごとに群雄割拠していた小王国を次々と征服し、全島の三分の二近くを支配下におさめ、マダガスカルを統一したメリナ王国の発祥の地が描かれている。

「アンブヒマンガの丘の王領地」と呼ばれるこの地は、二〇〇一年、ユネスコによって世界遺産に指定されたが、マダガスカルの人たちにとっては単なる過去の遺跡ではなく、いまでも重要な宗教的な意味をも持っていることに気付いた。

二百アリアリ札とアンブヒマンガの丘

アンブヒマンガは首都アンタナナリヴォの北東、二十四キロの所にある、いまでは小さな村だ。

アンタナナリヴォの北部方面タクシー・ブルース乗り場から、定員十五人ほどの小さなおんぼろバスはその二倍はゆうに越える乗客を詰め込み、坂道をあえぎながら走り続け、およそ一時間かかって村に到着した。時間がかかったのは、市内の狭い道路に車と人と牛車が入り乱れ大混雑していたためだ。市内を抜け、やれやれと思ったとたん、今度は穴ぼこだらけの劣悪な道路が続いた。

バスはアンブヒマンガ村が終点である。乗客を降ろすとバスは、運転手が村の連中とサ

路上市場

アンブヒマンガの丘。周囲2.5キロの城壁に囲まれた頂上に王宮がある

イコロ博打を一勝負楽しむ時間待機した後、タナへ出かける村人を乗せて戻ってゆく。

バス停前はちょっとした広場になっており、傍らには小さな食堂やお土産を売る店が数件並んでいる。バスを待つ村人はもちろん、何もすることがなくて暇つぶしをしている村人があたりにたむろしている。一時間も窮屈な姿勢でバスに乗っていて咽も渇いているので、まずは一休みと小ぎれいな食堂らしき店の軒を潜ると、意外なことに鶴の掃き溜めのごとき鄙にはまれなかわいい娘さんがいた。愛想も良くて、私の顔を見たとたん笑顔でボンジュールと挨拶して来た。

ペットボトルの水を買うつもりだったが、気が変わって棚に並んでいるビール大瓶とつまみにゆで卵を二個注文。これで四〇〇〇アリアリ（一二〇円）。木の切り株の腰掛に腰を据え、娘に村の様子などを尋ねようとしたが、英語は商売上で必要な単語しか通じないらしい。マダガスカルはかつてフランスの植民地で、独立した今でもフランスの影響力が強く、フランス語をしゃべる人は多いが、英語はほとんど通じない。

広場にたむろしている村人が代わる代わる店を覗きに来て、何か話しかけるが、私の知っているマラガスカル語は「サラマー」と「ミサオチャ」程度。前者は「こんにちは」、後者は「ありがとう」だ。この二つを適当に織り交ぜ、あとは身振り手振りで「一緒に飲むか」などと声をかける。そのうち鼻たれ小僧どもも押し寄せて来たので、ビールを少し残し、早々と腰を上げて表に出た。

この広場の一角には石造りの立派な門がある。この門が二〇〇アリアリ札に描かれた王宮への入り口の門である。門の隣に立てかけてある円盤状の大きな石は、毎晩あるいは危急の時にこの門を閉じるための扉である。重さ十二トンもあるというから、門の開け閉めは容易ではない。改めて二百アリアリ札を取り出し、実物と比べてみた。

大きな門があるこのバス終点の広場から王宮跡までは緩やかな坂道を五〇〇メート

バス停広場の飲み屋兼食堂

200Ar 札に描かれた門と円形石板の扉

ルほど登る。坂の途中には数軒の民家もあり、にわとりが道路わきの溝で草をついばんでいる。

最後は石畳の道になるが、突き当りに小さな監視小屋があり、切符切りのおじさんが一人眠そうな眼をして一万アリアリと書かれた看板を指差す。ユネスコ指定の世界遺産だから、もう少しにぎやかでユネスコの看板でも立っているのかと思ったが、それらしきものは何もない。レストランが観光客向けに建てたアンブヒマンガの看板がある程度だ。

二十段ほどの石造りの階段を登ってゆくと、踊り場にたむろしていた数人の村人からガイドは必要ないかと声をかけられた。遺跡にたむろして、観光客に声を掛けるやからにろくな連中はいないが、三十歳ほどの小柄な女性が何かを訴えるような真剣な眼をして私を見上げているのに眼が合ってしまった。仕方なくこの女性にガイドをお願いすることにした。

ガイドのヤンマーとその子供

「ガイド代はいくらですか」

「あなたのお気持ち次第で、いくらでもかまいません。私たちはこの村に住む者で、ボランティアで観光客のご案内をしています」

「それでは入場料金と同じ一万アリアリでいかがでしょう」

「もちろん結構です。私の名前はヤンマーです。あなたは日本人ですか」

私が頷いたのを見て、彼女は「こんにちは、ようこそおいでいただきました」ときれいなアクセントで言うではないか。

「日本語が話せるんですか」

「私は英語のガイドですが、いま日本語を勉強しています。まだ挨拶程度ですが、日本がとても好きです。二人の子供には、アキラとアキコという日本風の名前を付けました」

「ほぉ、男の子と女の子ですか」
「いえ、二人とも男の子です。アキコが女の子の名前だということは知っていますが、きれいな名前だからこれでいいのです」
　このガイドの風貌は、少し浅黒いものの南方モンゴロイド系の顔である。フィリピン人やインドネシア人に近い。身長も百五十五センチというから小柄なほうである。
　階段を登りきった所にある王宮前広場の大きなガジュマルの木の下で。ヤンマーさんはメリナ王朝の歴史を訥々と語り始めた。
　「私たちメリナ族の祖先は、西暦三世紀から五世紀ごろ、インド洋を越えてこの島にやってきたといわれています。この島の東海岸に上陸し、十五世紀ごろにはこの中央高地に定着したのです」
　西暦三世紀といえば日本では弥生時代。卑弥呼が中国に使いを出したという史実を待つまでもなく、人類はすでに海を越えての交流を始めていた。インドネシアの多島海の一角から、未知なる世界を目指して海に乗り出した若者が、はるかな旅の果てにマダガスカルにたどり着いたと想像することは楽しい。
　彼らが使ったのは一本の木をくりぬいた丸木船に違いない。船の横にアウトリガー（舷外浮材）という丸太のような浮きを突き出した丸木船はすべてが木造ゆえに、いくら波が荒くても沈むことはない。
　バリ島の漁師に聞いた話では、彼らが大きな魚や亀を釣り上げたときには、船に水を汲み入れ、水面すれすれまでわざと沈没させて、獲物を船に引き上げやすくするのだという。獲物を引き上げた後、水を掻き出して再び船を進ませるのだ。

アウトリガー付き丸木舟

　経験的に一定の向きに吹く貿易風の存在も知っていただろうし、帆を張れば素晴らしいスピードで丸木舟は疾走する。私はこの後、モザンビーク海峡に面するマダガスカル南西部海岸地方まで足を延ばすことになるのだが、同じような構造のアウトリガー付き丸木舟が今でも漁師たちにさかんに使われているのを目にした。
　マダガスカル人のルーツがアジアであることは、顔つきや体形など形質的な類縁関係だけでなく、言語学的にも証明されている。マダガスカル語は、台湾から東南アジア島嶼部、太平洋の島々にひろがるオーストロネシア語が基になっているのだ。
「十七世紀の終わりごろ、国家機構を整備し、周辺の小王国から一歩抜け出したアンドリアナンプイニメリナ王（1787～1810）が国内統一に乗り出します」
「なになに？　もう一度言ってよ。長い名前だね」
「マダスカル人は姓しかなく、あなた達が使っているギブンネーム・名がありません。マダガスカル人の姓は、家系図であるといえるかも知れません。子供には父方と母方の姓の

一部をとって新たな姓を与えます。だからかなり長い姓も珍しくありません。しかし王様の名前は特別です。この名前はイメリナ、つまりメリナの地に望まれた者というような意味を持っています」

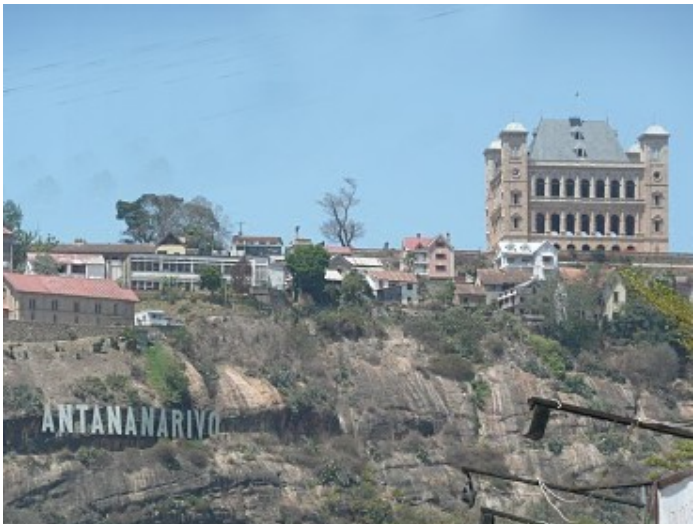
この王は後にメリナ王朝史に英傑として名前を称えられることになるのだが、分裂状態にあったメリナ人を統一して王都をアンタナナリヴォに定めた。ここにメリナ人の統一王朝が出現したわけである。行政機能はアンタナナリヴォに移ったが、アンブヒマンガは宗教的、精神的な意味を色濃く含んだメリナ族の故地となった。

「国家機構の整備というのは、たとえばどんなことをやったんですか」

アンドリアナンプイニメリナの肖像画

「王国を統一したアンドリアナンプイニメリナは，国力をつけるべくいろんな改革事業に着手しました。アンタナナリヴォ周辺の沼沢地に大規模な排水灌漑事業をおこない，水田を拡大することによって農業生産力を増強しました。また行政制度・軍事制度・貢納賦役制度を定めるとともに，定期市の運営を管理するようなことも行いました。殖産振興ですね」

このように国力を増強したメリナ王国は，



アンタナナリヴォの丘の上にある女王宮（一万 Ar 札）

アンドリアナンプイニメリナの治世下で，周辺地域への版図拡大事業に着手するようになる。元来，マダガスカル中央高地の中心部に局限されていた王国の版図が，王の治世下で南に，そして東にと，拡大を遂げはじめるのである。

「私たちはまだ王宮の入り口に立っています。少し先に進みましょう」

マダガスカル統一の歴史を頭の中で整理している私に、ヤンマーさんは先に進むように促した。広い王宮を見て回るには相当な時間が必要なのかもしれない。

まず案内されたのが王宮前の広場のようなところ。そこにはガジュマルの大木が葉を茂らせている。

「この木（Ficus）はアンドリアナンプイニメリナ王時代からある神聖な木で、王の象徴です。樹の周りを見てください。十二の石の椅子が置かれています。この石は王の十二人の妃が座る石です」

王宮前広場の聖なるガジュマルの木

根元に置かれた一２の后のための石

「十二人もお妃がいたんですね。うらやましい」

「王はこの地方の十二の高い丘に、それぞれ妃を住まわせました。現在の首都アンタナナリヴォにある女王宮もその一つです。しかしここアンブヒマンガの丘に住んだ妃のくらいが一番高かったのです」

アンタナナリヴォ市内にある女王宮は昨日、見物にいって来た。市内では一番高い丘の頂上に建てられていて、どこからでもよく眺められる。アンブヒマンガの王領地とともに世界遺産に指定される予定だったが、一九九五年の火事で内部が全焼してしまったため、現在再建中だ。この女王宮は一万アリアリに描かれており、やはりマダガスカルのシンボルの一つになっている。

メリナ族にとって七と一二は善い数字なのです。逆に八は不吉な数字です。一二の妃を置いたのもこれが理由です」

「日本の八は漢字で書くと末広がりなので好まれる数ですよ。なぜメリナ族では八は嫌われるんですか」

私は足先で地面に八の字を描きながらヤンマーさんに尋ねた。

「八はマダガスカルではヴァルと発音しますが、これは敵という意味にも通じます」

「王を象徴する聖なる木の周りを十二個の石が取り囲んでいるというのは、十二人の后にかしずかれているという象徴なんですね」

「もちろん象徴としての意味もありますが、儀式などがある日は全員がここに集まり、実際にその石に座ったのです」

王宮を背後にしたがえた広場の一角に、高さ二メートルほどの石垣で囲まれた台地があるが、そこが儀式の時に王が演説する場所だったという。竜血樹の大木が石垣に絡みつくように根を伸ばしている。

よく見ると樹の幹には、いくつかの牛の角が張り付けてある。一年のうちに何回か行わ

白壁を背にした王が演説する場所。竜血樹には牛の角が祀られている

れる聖なる祭りのときには、この広場で犠牲の牛が屠られ、神とたたえられている諸代の王や祖先にささげられるのだという。

また今でも各地から巡礼が訪れ、豊作を祈願し、家族の平安を祈るため、犠牲をささげてゆくことは珍しくないという。牛一頭では負担が重いため、鶏を捧げることが多いという。広場のほぼ中央にハート形の大きな石が横たわっているが、そこが供犠の場所だという。

そんなことをヤンマーさんから聞いていると、数人の家族連れらしき集団が、王宮につながる階段を花束を持って登って行くのが見えた。私にとっては単なる文化遺跡にすぎないアンブヒマンガの丘だが、この地に生き、この地の歴史を背負った人たちにとっては、ここはいまだに聖なる場所なのだ。

「メリナさん、あれは巡礼に来た人たちでしょう。私はとても興味があります。あの人たちの後を付いて行っていいですか」

「かまいませんよ。どこから来たのか聞いてみましょう」

巡礼者たちはみな靴を脱いではだしで石の階段を上って行く。私も靴を脱ぎ、靴下も脱ごうとしていると、ヤンマーさんがその必要はないという。

「彼らにとってここは聖地ですから靴を脱ぎますが、あなたは観光客ですから靴のままで結構です。私もクリスチャンですから靴は脱ぎません」

「ヤンマーさん、私たちはいろんな異なった信仰を持っていますが、他人の信仰には敬意を表するものですよ。そうすることによってあなたの信じているキリスト教も、他の宗教を信じている人たちから敬意を表されるのではないですか」

現在のマダカスカル国民の約四割がキリスト教徒、一割弱がイスラム教徒なのだが、半分以上は自然崇拝を中心とした伝統的宗教の信者である。イギリスやフランスの宣教師がキリスト教の布教活動を執拗に展開し、西洋の価値観を押し付けようとする中、自分たちの信仰と価値観を死守しようとした多くのマダガスカルの人たちがいるのである。

私は裸足になり帽子も脱いだが、ヤンマーさんは靴を履いたまま私の後をついてきた。王宮は驚くほど小さな木造建築だった。横幅が四間、奥行が三間ほどであろうか。

この王宮のオリジナルは、一七八八年ごろに建てられたと推定されているが、日本でいえば徳川時代、第十一代将軍家斉の時代であ

小さな王宮。一室しかない

る。京都御所や江戸城の規模に比べると王宮といってもあまりにささやかである。

壁は幅五十センチほどの黒く塗られた黒壇の板で囲われており、勾配の急な切妻の屋根が覆っている。屋根材は直径十センチほどの丸太を薄く輪切りにしたものを並べていたが、以前はバナナの葉で葺いていたらしい。屋根の端部には赤く塗られた交差する二本の木が突き出している。出雲大社の大きな屋根の鳥衾（とりぶすま）を思い出した。

「家に入る時は必ず右足から入ってください。出るときはあとずさりするように後ろ向きになって出ます。それがメリナ族の風習で、王に敬意を表すことを意味しています」

内部もこれで王宮かと思うほど簡素であり、一室しかない。まず目についたのは部屋の中央にある長さ十メートルほどの太い大黒柱。奴隷達によってアフリカ大陸から運ばれてきたという。家具調度品は王様と妃がそれぞれ使ったベッドが二台のみ。

妃のベッドは普通の木造のベッドだが、王のベッドは土間から二メートルほどの高さに眠るようになっている。二段ベッドの上の段に寝ると思えばよい。梯子で登るようになっている。恐らく安全上のことを考えてのことであろう。

屋根上にＸに突き出す赤い木は牛の角を表す、王権の象徴

「王様のベッドにしては小さくて粗末ですね」

「アンドリアナンプイニメリナ王は身長が一四五センチしかなかったといわれています。私が一五五センチですから、かなり小さいですね。お妃はそれより小さく、十二人の后が一台の妃用のベッドに全員で寝ることができたそうです。王は二十三年の治世中、七年間をこの王宮で過ごしました」

身長が低いのはモンゴロイドの特徴である。王宮に隣接する博物館には、王のポートレイトが展示してあった。僧侶の袈裟のような一枚の布をまとい、槍を掲げた姿は威厳が

出雲大社の鳥衾

あり、身長が低いことは感じられなかった。しかしこれは後世の人が王を顕彰するために描いたものだろうから、あまりに背が低い立ち姿は威厳を損なうとして嫌ったのであろう。

王宮がこじんまりしているのは、分裂状態にあったメリナ族の小王国を統合し、王権を握ったといってもまだ初期段階で、贅沢をするほどの経済的な余裕が少なかったからだろう。そうはいっても、マダスカルにはいまだに日干しレンガの穴倉のような家で、土間に寝ている多くの庶民がいることを考えれば、神とたたえられた王の権威は十分に保たれる偉容は感じられる。

先ほどの巡礼の家族連れは、部屋の片隅に集まり、家長らしき男が真剣そうな表情で王のベッドの角辺りに祈りをささげている。家族全員も黙とうしながら、家長の後ろに従っている。

「メリナ族にとっては北東の方角が聖なる方向なのです。北枕で眠れるのは王だけだったんです。だから彼らは部屋の一番神聖な場所で神聖な方向に向かって祈っているのです」

「もうひとつ面白い話を教えましょう。私たちメリナ族はけして仰向けに寝ることをしません。必ず体を横にして眠ります。仰向けに寝るのは死んだときだけです」

ヤンマーさんは敬虔な祈りをささげている人たちの妨げにならないように、入り口近くに私を誘うと、妃のベッドを指さした。確かに妃のベッドは東を向いており、王のベッドとは直角をなしている。

王の墓に供物をささげる巡礼の家族

精霊信仰

巡礼の家族たちは十五分ほど祈りを捧げると王宮から出て、さらにその裏手にある階段を登って行く。王宮の一段高いところには歴代の王の墓所があるらしい。王宮の内部をもっとよく見たかったが、とりあえず私もあとを追うことにした。

歴代の王の墓は王宮の形をそのままそっくり小型化したような家形墓である。マダガスカル語でトラノマシナと呼ばれるこの窓のない小さな建物の真下に造られた石室の中に王たちの遺体は埋葬されている。現在は四つのトラノマシナが建っているが、これは二〇〇八年にマダガスカル政府によって再建されたものだ。

伝承によれば、かつては十二のトラノマシナがあったとされるが、これらは植民地時代の一八九七年、フランスの統治者によって破壊されてしまった。王族の墓が民衆の大きな信仰を集め、独立闘争の精神的支柱になるなど植民地支配の妨げになるとフランスは恐れたのだ。

墓の裏手には供え物をする石が置かれて

王宮を小型化したような王の墓

おり、融けて流れ出したろうそくが石の表面に白い筋を引いていて、石全体が油光りしている。家長らしき男が再び長い祈りの言葉をつぶやいた後、家族全員が花やお菓子やたばこなどをかわるがわる供えてゆく。

巡礼にやって来た家族にぜひ話を聞いてみたいと思ったので、ヤンマーさんに通訳してもらうことにした。

「サラマー、日本から来たカワサキといいます。ちょっとお話を聞かせてください。日本人も先祖のお墓参りを、あなた達がしていたのと同じような形でします。しかしこれは王族の墓ですね。なぜ自分の先祖ではなく、ここにきて祈るのですか」

「私たちももちろん祖先の霊を大切にしている。しかし今日は特別だ。娘の一人が病気にかかっている。村の祈祷師に相談したら今日、王の聖なる遺骨に祈らなければならないといわれ、やってきた」

ザクテンベルテン（五十五歳）と名乗る家長は、ここから百キロほど北の村に住んでいるという。数頭の瘤牛を飼い、自分の畑と田を持つ、ごく一般的な農民らしい。朝早く家を出て、タクシー・ブルースを乗り継いでアンブヒマンガの丘にやって来た。

「王の墓には願いを叶えてくれる力があるのですか」

「王は我々の神だ。死んでも霊魂は我々生きているものと関係を持ち続ける。王の祖先の怒りをかうことはできない。牛が子供を産むように、コメが豊作であるように、家族が健康であるようにと、何でもお願いに来る」

マダガスカルの多くの人たちは今でも祖先の精霊はもちろん、森に住む精霊や木や石に宿る精霊を信じているという。そしてその精霊たちは人々の毎日の生活に深くかかわっているのである。歴代の王や王女の墓地も、王族にとっての祭祀対象であるだけでなく、メリナ族全体を守護する呪的な力を持った場所なのである

いろんな精霊の中で、死者の霊魂は人間と最も深い関係を持つと信じられている。ファナヒと呼ばれる死者の霊魂は、ラザナと呼ばれる祖霊になり、生者と関係を持ち続ける。祖霊は人間に憑依し、その身体を操ることも

供物台

できるので、祖霊と良好な関係を持ち続けることはとても重要なのだ。

このような「霊的存在への信仰」はイギリスの人類学者タイラーによってアミニズムと名づけられた。霊的存在が肉体や物体を支配するという精神観、霊魂観は、いまでも世界的に広く存在している。日本人が信じる八百万の神、あるいは依り代信仰などもこれに近い観念であろう。

キリスト教が一番すぐれた宗教だというヨーロッパの視点から、アニミズムはかつて原始的で幼稚なものであると考えられ、蔑視された。だからあまり使いたくない言葉なのだが、宗教を語る時の共通言語となっているので仕方ない。

アミニズムは社会の近代化に伴い消滅すると考えられがちで、フランス植民地時代にはキリスト教会が先頭に立ってこのような土着信仰を撲滅しようと行動した。また植民地当局も憑依儀礼や祭りを禁止するなど弾圧したが、マダガスカルの土着信仰はなくならなかった。

伝統的な宗教と外来のキリスト教徒の葛藤は、マダガスカルでこれからも続くのだろうか。祖父の代からキリスト教徒だというヤンマーさんは、私がマダガスカルのこのような面に触れるのをあまり好まないような態度だった。「無知」な人たちをキリスト教に教化しなければ国の発展もおぼつかないと考えているようだった。

巡礼の家族は近くのガジュマルの木の下でしばらく休息すると王墓を後にした。まだ他にも祈りを捧げる場所があるのだという。

王宮と歴代の王墓の隣には、その後メリナ王国を統治することになったラナヴァルナ一世の別荘があり、王宮よりはかなり立派な建物だったが、この紹介は割愛することにする。

メリナ王国はマダガスカルの利権を争う英仏両国の対立を利用しながら、イギリスの後押しでフランスと軍事衝突するなど植民地化に抗ったが、英仏の駆け引きによって結局、マダガスカルはフランスが獲得することになった。

フランスは一八九六年、アンタナナリヴォの王宮を攻撃し、メリナ王朝は崩壊し、マダガスカルはフランスの植民地になった。メリナ王国最後の女王、ラナヴァルマ三世はフランスによってアルジェリアに追放され、その地で亡くなったという。

丘の上からの展望

マダガスカルが独立したのは、第二次世界大戦後の一九六〇年のことである。

帰りは丘に登って来た道と逆方向に降り、丘のふもとを半周して、元のバス停まで戻ることにした。思いがけず巡礼の家族に出会い、ガイドのヤンマーからマダガスカルの風習や葬送に関する話を聞くことができたので、

少し頭を整理したかった。

丘の上の展望台から眺めると、アンブヒマンガの丘は周囲の丘に比べて森が豊かに残されていることが分かる。この辺では一番高い丘なので展望もよい。周囲のなだらかな丘陵の上には民家と畑が散在し、低い谷筋には

休耕中の水田が広がっている。ヤンマーによれば、天気が良い日には首都のアンタナナリヴォのビル群が遠く眺められるという。

常緑の照葉樹林にツタの絡まる森は、山梨の落葉広葉樹林と違って、いかにも熱帯の森を思わせるが、よく開墾された里の景色は、ここがアフリカの一角のマダガスカルであることを忘れさせてくれるほどなじめる風景だ。

人ひとりがやっと通れる畦道をたどり、勢いよく流れる小川を渡り、農家の垣根に沿って歩いた。一軒の農家の庭先に桃色の花を付けている木を見つけた。枝ぶりは桃の木そっくりだ。まさかと思いながら近づき、枝を引きよせてみるとやはり桃の花だった。香りも桃の花の香りだ。

私は故郷を思った。私の生まれ故郷の山梨県笛吹市一宮町は日本一の桃の産地だ。四月には扇状地の傾斜はピンクの絨毯でうまる。地球の反対側の南半球に位置するマダガスカルもいま初春の季節だ。

日本から直線距離でも一万二千キロも離れたマダガスカルに、日本の故郷と同じ桃の花が咲く、それは世界の生命がつながっている、連続している証拠である。

最近はマダガスカルもテレビ番組などで頻繁に紹介されるようになった。しかしそこで取り上げるマダガスカルは、きまって独自の進化をとげたユニークな生態系だ。確かに世界第四位の面積を持つこの島には、世界の全植物・動物の種のうちなんと五%もが分布

し、そのうち八〇%はマダガスカル固有種である。希少生物の宝庫であり、多くの絶滅危惧種にとって最後の楽園ともいえる。それはこの島が数千万年もの長い時間、私たちの住む世界と没交渉で独自の生命進化を続けてきたからだ。その断絶にもかかわらず、日本で春を告げる桃の花や菜の花が咲いている。この小さな命の風景の共通性に、世界をつなぐ何かを私は感じる。

だから私はマダガスカルのことを書こうとしたとき、「独自の」、「固有の」といった形容詞がつくマダガスカルではなく、アジアあるいは日本と連続性が感じられる、いわばなじめるマダガスカルから書き始めたかった。顔つきや体形、祖先を敬う信仰や葬送儀礼などの共通点を始め、労働集約的に棚田を耕し、米を主食とするマダガスカルの文化に、私は深く共感した。

マダガスカルで見るべきものは夕日に映えるバオバオの木や、独自の進化を遂げたキツネザルだけではない。マダガスカルにも人が住んでおり、日々の生活を送っている。その人たちに共感すること、その人たちの生き方を理解すること、それが私の旅の目的だ。

もとより三週間という短い旅の期間で、知りえることは限られている。言葉の不自由な土地で、とんだ勘違いをすることもあろう。しかし断片もこまめに拾い集め、積み上げていけば、そのうち何かを浮かび上がらせてくれるだろう。

私のマダガスカルの旅は始まったばかりである。次回はマダガスカルの二〇〇〇アリアリ札に描かれた棚田と米について語ってみたい。

fujizakura